

岩手県沢内村立沢内病院歯科
岩手県盛岡市県立中央病院歯科口腔外科*

沢内村では、昭和52年度より35~59才を対象として総合成人病検診を行っており、その一貫として歯科部門では、検診、パノラマX線撮影、衛生教育、希望者に対する歯石除去を行っている。今回、我々はその活動の概要と過去6年間の40才台の口腔状況について調査したので、その結果を報告した。1人平均う歯数(D+F)は、男性5.8本、女性9.0本で、女性が高い値を示した。1人平均現在歯数は、男性24.9本、女性19.9本で、男性が高い値を示した。健全歯数、処置歯数、未処置歯数は、男性で、それぞれ19本、2.6本、3.3本、女性は、11.0本、6.0本、3.0本の割合で、女性における処置歯数が、特に高い値を示した。1人平均喪失歯数は、男性4.6本、女性8.6本で、女性が高い値を示した。喪失歯所有者率も同様に女性が高い値を示した。喪失歯所有者の補綴状況は完3者、一部完3者、未3者の割合が、男性ではそれぞれ30.4%、31.7%、37.8%、女性では39.9%、41.0%、19.3%で、完3者、一部完3者は女性に多く、未3者は男性に多い。1人平均根尖部病変歯数では、男性0.58本、女性1.04本で女性が多い。1歯あたり歯槽骨吸収程度は、男性1.63度、女性1.71度であった。今回の調査では、女性における早期喪失、男性における補綴状況の低さが、目についた。又、過去6年間を通して、女性の補綴状況にやや改善が認められたものの、その他の口腔内状態は、特に改善されておらず、成人における歯科治療、予防の困難さを痛感した。しかしながら、この成人病検診の中での歯科活動を通じて、住民の口腔衛生に対する関心、意識は、高まってきており、統計的には短期間に改善されるとは思われないが、将来においては、この活動が歯科疾患の早期発見、早期治療に結びつくものと思われる。我々は、今後も、長期的展望に立ち、現在の成人歯科予防活動を継続し、検討していきながら、成人歯科治療、及び予防に、積極的に取り組んでいきたいと思う。

演題8. 衣川村における学童齲蝕罹患についての比較検討

○佐々木 勝 忠、桜 庭 敬 子

岩手県衣川村国保診療所歯科

岩手県衣川村は、昭和49年より衣川村国保診療所に歯科の設置をみたが、それ以前は無歯科医村であり、学童の口腔状態が悪いため、昭和47年より昭和54年まで東北大学歯学部予防歯科学教室による「無歯科医地区学童を対象とした保健計画」が実施された。その概要は口腔衛生学会雑誌第28巻第2号に高木氏らの論文として記載されている。

今回、私達は最近の齲蝕予防活動の評価を目的に、昭和56、57、58年の衣川村学童の歯科検診結果と、歯痛経験調査結果について、高木氏の論文資料と比較検討した。

結果、衣川村学童の口腔状態を昭和47、52、58年と経年的に比較すれば、全学年のDMF者率は、89.9%、79.0%、57.5%と減少を示し、とくに低学年での減少が著明であった。DMFT指数は、3.55、2.99、1.52と同様に減少を示した。D歯率は、85.9%、41.5%、25.0%、M歯率、5.5%、1.9%、0.7%と減少し、逆にF歯率は、8.7%、56.8%、74.8%と著しく増加した。

昭和47年の衣川村学童の口腔状態は、厚生省歯科疾患実態調査による昭和50、56年の全国平均のDMF者率、DMFT指数を大きく上まわっていたものの、昭和58年では全国平均より低下を示していた。

歯痛経験のアンケート調査では、今痛む歯がある、今は痛くないがときどき痛むと答えたものの割合が、昭和47年43.0%から52年22.8%と減少したものの、58年では19.9%とあまり減少を示さなかった。昭和58年の歯痛を訴える学年別割合では低学年の割合が多かった。また学校で歯痛を訴えたり、歯痛のために学校を休んだ経験をもつものの割合は、昭和47年より経年的に減少したが、昭和58年では増加を示した。

結論考察、多方面からの齲蝕予防のアプローチにより本村学童の齲蝕は著しい減少をみた。しかしながら齲蝕減少にもかかわらず、歯痛を訴えるものの減少が伴わない。歯痛は乳歯に起因すると考えられる。今後、低年齢児の齲蝕予防に努力する必要がある。

演題9. 小児歯科外来の初診患者における実態調査

○小野 玲 子、八重畑 雅 子、野 坂 久 美 子
甘 利 英 一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

この数年、小児歯科外来を訪れる患児は、色々な点で